

第一三共の企業理念

革新的医薬品を継続的に創出し、提供することで、
世界中の人々の健康で豊かな生活に貢献する。

医療技術の進歩や人類が生まれ出してきた医薬品は、多くの人々の命を救い、健康的な生活に貢献しています。しかし、未だに治療満足度が不十分であったり、治療法の確立されていない多くの疾病が存在し、これら疾病に対する治療、予防、さらには一人ひとりの特性に応じた治療が求められています。医療の一翼を担う製薬企業は、社会からこれらの課題を解決することを期待され、私たちはそれに応えることを使命としています。第一三共の企業理念は、革新的医薬品—ファーストインクラス/ベストインクラス—を創出し、提供することにより、人々の健康で豊かな生活に貢献することです。企業理念、すなわち私たちの存在意義を果たすため、第一三共グループは、高い使命感を持ち、惜しみない努力を傾注して、社会の期待に応えます。

2015年ビジョン

Global Pharma Innovatorの実現

2015年に「世界の主要地域に拠点を構えて自ら事業を展開し(Global)、革新的医薬品を継続して創出・提供する創薬型企業(Pharma Innovator)」となること

計数目標

売上高

1兆5,000億円

営業利益率

25%以上

海外売上比率

60%以上

研究開発における重点疾患領域

「血栓症」「糖尿病」「癌」「自己免疫疾患/関節リウマチ」各領域でグローバルトップクラスのパイプライン構築

第1期中期経営計画 (2007~2009年度) 成長基盤拡充期間

2015年ビジョン達成に向け、成長軌道を確立すべくグローバルレベルで収益性を高めるための基盤づくりを行ってまいります。

2009年度目標数値

●売上高 9,600億円

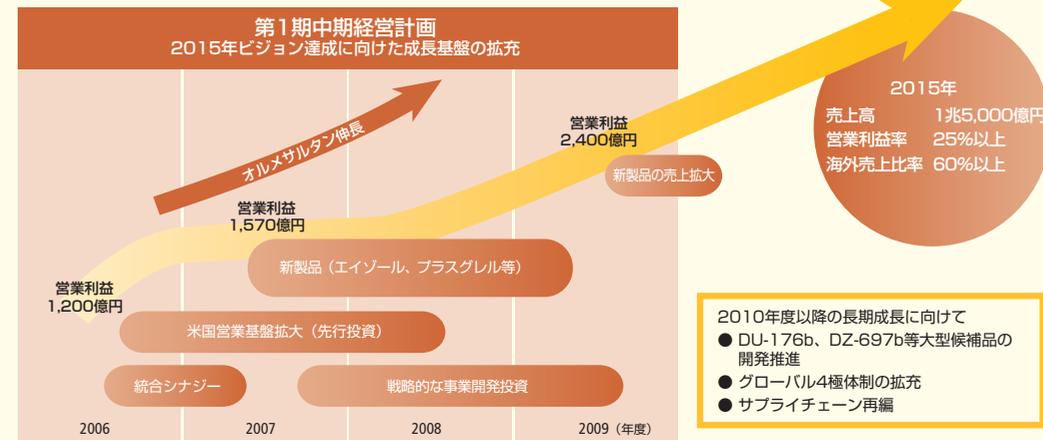
●営業利益 2,400億円

●海外売上比率 40%以上

重点施策

- 経営統合によるシナジーの最大化
 - ・ 新薬創出力強化、研究開発パイプラインの充実
 - ・ 主力製品の維持、拡大
 - ・ 業務効率の向上
 - ・ 国内営業体制の構築
- 米国における営業力の拡大
- 戦略的投資による事業拡大

2015年ビジョン達成までのプロセス



積極的な 株主還元

当社は、株主還元を重要な経営課題の1つと捉え、積極的に取り組んでいます。2007~2009年度の中期経営計画期間中の当期純利益相当額は、配当と自己株式取得により、すべて株主還元に充当する方針であり、「総還元性向100%」を目標としています。

「総還元性向」目標：100%

中期方針(2007~2009年度)

- 総還元性向100%=当期純利益相当額を株主還元へ充当
- DOE5%の早期達成を目指し、安定的に配当を増額
- 自己株式取得は取締役会決議により機動的に実施

2009年度目標

DOE
5%
以上

2006年度
年間配当金60円

DOE
3.5%

2007年度予想
年間配当金70円(予想)

ROE10%以上、
配当性向50%程度

DOE(純資産配当率)=配当性向×ROE

	2006年度(実績)	2009年度目標
EPS (1株当たり当期純利益)	107.7円	2倍以上
ROE (自己資本当期純利益率)	6.3%	10%以上

つくっているのは、希望です。

私たちは、人間をこよなく愛する製薬会社です。
人間といういのちの輝き、いのちのすこやかさを愛し、
そのためになることなら、
どんな努力も惜しまない製薬会社です。
私たちは、どこよりも先進の集団でありたいと思います。
すぐれた研究力と開発力をみがき、
つくれなかった薬をつくり、治せなかった病を治す。
そのことに限りなく貢献できる会社になろうと思います。
私たちは、
どこよりも誠実な集団でありたいとも思います。
医薬品づくりは、いのちにかかわる仕事。
そのことを胸深く刻みつつ、誰からも、
心から頼られるパートナーでありたいと思うのです。
人間の、かけがえのない一日一日をしっかりと守ること。
思いがけなく待ち受ける病に、すばやく立ち向かうこと。
私たち第一三共がつくっているものは、
医薬品であると同時に、
すべてのいのちをまばゆく照らす「希望」だと
思うのです。

目次

第一三共の企業理念／ビジョン／中期経営計画P1～2
コーポレートスローガン／ごあいさつP3～4
中間連結決算の状況／通期の見通しP5～6
中間連結財務諸表の概要をご報告しますP7～8
開発パイプラインについてP9～10
Zoom UpP11～14
社会の一員としてP15
企業インフォメーションP16～18

ごあいさつ

株主・投資家の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

第一三共グループは、2007年4月に事業子会社であった三共と第一製薬を完全統合し、新たに生まれ変わりました。また、これに先立って2007年2月には、グローバル創薬型企業（Global Pharma Innovator）の実現に向けた2015年ビジョンと第1期中期経営計画（2007～2009年度）を策定しております。

新生・第一三共のスタート、そして第1期中期経営計画がスタートしてから、初めての中間決算発表を迎えましたが、約半年間が経過して、まずは順調に着実に立ち上がったことを実感しております。

当社グループの当中間期における業績は当初予想を上回る結果となりました。

売上高は4,437億円（前年同期比8.7%減）で、グローバル製品を中心に世界4極での自社販売力強化が順調に進んでおり、非医薬品事業のグループ外自立化、海外子会社の決算期変更などの特殊要因を除けば実質的には増収となっております。また、営業利益は939億円（同19.9%増）、経常利益は1,006億円（同14.2%増）と大幅な増益となりました。中間純利益は、前年同期に非医薬品事業の売却益を計上したことから、9.9%減の602億円となっております。

通期の見通しにつきましても、売上高、利益とも当初予想を増額修正しております。

売上高は、390億円上方修正となる8,760億円を見込んでおります。利益につきましては、営業利益1,600億円、経常利益1,710億円、当期純利益1,000億円と、いずれも前期比で増益を見込んでおります。

また、株主様への還元につきましては、積極的な還元方針のもと、配当金は、当中間期で前年同期から5円増配した1株当たり35円、通期では対前年から10円増配の1株当たり70円の配当を予定しております。また、6月から7月にかけて1,000万株（332億円）の自己株式を取得しております。

引き続き株主・投資家の皆様のご支援をお願い申し上げます。



代表取締役社長兼CEO

庄田 隆

●連結財務ハイライト





中間決算(連結)の状況

売上高 **4,437億円** (前年同期比 **8.7% 減**)
 営業利益 **939億円** (前年同期比 **19.9% 増**)
 経常利益 **1,006億円** (前年同期比 **14.2% 増**)
 中間純利益 **602億円** (前年同期比 **9.9% 減**)

■業績全般の概況

- 売上高は4,437億円(前年同期比8.7%減)となりました。非医薬品事業のグループ外自立化、海外子会社の決算期変更など特殊要因が減収の主要因であり、グローバル製品を中心に世界4極で自社販売力強化は順調に進んでおり、特殊要因を除く実質的比較では増収となっております。
- 経営統合によるコストシナジーや一部経費支出の下半期繰越等により、営業利益は939億円(前年同期比19.9%増)、経常利益は1,006億円(前年同期比14.2%増)と大幅な増益となりました。中間純利益は、前年同期に非医薬品事業の売却益等が計上されているため、9.9%減となる602億円となりました。

■国内医療用医薬品事業

- 高血圧症治療剤のオルメテック、アーチスト、カルプロック、消炎鎮痛解熱剤ロキソニン、合成抗菌剤クラビットなどがそれぞれの市場の伸長を上回り拡大しましたが、競合激化、後発品の攻勢等により、高脂血症治療剤メバロチン、造影剤オムニパーク等は減少し、売上高は2,145億円(前年同期比0.3%減)となりました。



オルメテック



クラビット

■海外医療用医薬品事業

- 北米地域での売上高は897億円(前年同期比17.4%減)となりました。米国子会社の決算期変更により減少となりましたが、高血圧症治療剤ベニカー、高脂血症治療剤ウェルコール、貧血治療剤ヴェノファー等の成長により実質的には増加しております。



ベニカー



ウェルコール



ヴェノファー

- その他地域の売上高は、欧州での高血圧症治療剤オルメテック、アジアでの高血圧症治療剤オルメサルタン、合成抗菌剤レボフロキサシンの成長が業績を牽引し586億円(前年同期比66.1%増)となりました。当中間期に、欧州子会社の決算期変更と中南米子会社2社の連結対象化を行い、170億円の増収要因となりました。



レボフロキサシン(原薬)

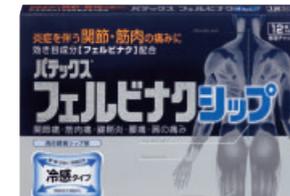
- 海外ライセンスへの輸出とロイヤリティ収入は、合成抗菌剤レボフロキサシンが継続拡大しておりますが、高脂血症治療剤プラバスタチンの原末輸出が減少し、397億円(前年同期比13.5%減)となりました。

■ヘルスケア事業

- ヘルスケア事業の売上高は244億円(前年同期比0.6%減)となりました。
- 外用消炎鎮痛薬パテックスフェルビナクシリーズ、しみ〔肝斑〕改善薬トランシーノを新発売し業績に寄与しましたが、2006年12月に水虫用薬ラミシールATを導入元に返還したことが影響し、前年同期との比較ではほぼ横這いの売上水準となりました。



パテックスフェルビナク35



パテックスフェルビナクシップ

■その他事業

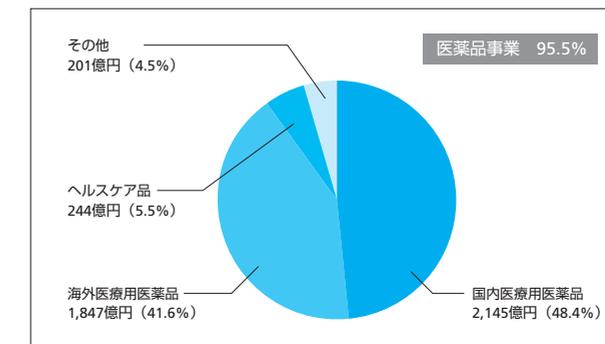
- 当社グループは、経営資源を医薬品事業へ集中させるため、非医薬品事業のグループ外自立化を進めているため、当該事業売上高は166億円(前年同期比70.3%減)となりました。

通期の見通し

売上高 **8,760億円** (前期比 **5.8% 減**)
 営業利益 **1,600億円** (前期比 **17.4% 増**)
 経常利益 **1,710億円** (前期比 **12.4% 増**)
 当期純利益 **1,000億円** (前期比 **27.3% 増**)

- 売上高は、当中間期、計画をやや下回った国内医薬品事業を若干減額修正しました。海外医療用医薬品事業は、高血圧症治療剤オルメサルタン、貧血治療剤ヴェノファーの好調、円安傾向などを背景に、全体では前回予想より390億円上方修正し、8,760億円を見込んでいます。
- 経費関連では、新たに導入した抗RANKL抗体デノスマブや大型プロジェクトに係る開発費の増加による研究開発費、米国で新発売した高血圧症治療剤イゾールの販促費用の増加も見込み、営業利益、経常利益、当期純利益とも小幅な増額修正に留まっております。
- 非医薬品事業のグループ外自立化等事業再編の影響、欧米グループ会社の決算期変更の影響を除く実質的対前年比較では、売上高6.5%増、営業利益32.3%増、経常利益26.1%増と、増収増益を見込んでおります。

事業別売上高構成比(当中間期)





中間連結財務諸表の概要をご報告します

中間連結貸借対照表 (要旨)

科目/期別	(百万円)	
	当中間期 自 2007年9月30日現在	前期 (2007年3月31日現在)
● 資産の部		
流動資産	944,859	1,015,840
現金及び預金	63,850	232,614
受取手形及び売掛金	190,753	197,158
有価証券	490,527	388,896
たな卸資産	105,107	107,758
その他	95,438	90,137
貸倒引当金	△ 818	△ 724
固定資産	570,951	620,994
有形固定資産	240,397	248,857
無形固定資産	53,806	60,153
投資その他の資産	276,747	311,983
投資有価証券	245,873	262,240
その他	31,223	50,164
貸倒引当金	△ 349	△ 421
資産合計	1,515,811	1,636,835

科目/期別	(百万円)	
	当中間期 (2007年9月30日現在)	前期 (2007年3月31日現在)
● 負債の部		
流動負債	188,576	281,510
支払手形及び買掛金	49,508	56,435
短期借入金	4,554	8,560
未払法人税等	19,093	27,573
その他	115,419	188,940
固定負債	56,961	83,176
長期借入金	1,354	1,533
繰延税金負債	33,859	36,145
退職給付引当金	10,468	35,062
その他	11,278	10,435
負債合計	245,537	364,687
● 純資産の部		
株主資本	1,199,399	1,191,346
資本金	50,000	50,000
資本剰余金	179,862	179,860
利益剰余金	1,012,891	971,483
自己株式	△ 43,354	△ 9,997
評価・換算差額等	67,418	77,310
その他有価証券評価差額金	62,470	72,358
為替換算調整勘定	4,947	4,951
少数株主持分	3,455	3,491
純資産合計	1,270,273	1,272,148
負債・純資産合計	1,515,811	1,636,835

中間連結損益計算書 (要旨)

科目/期別	(百万円)	
	当中間期 自 2007年4月1日 至 2007年9月30日	前中間期 自 2006年4月1日 至 2006年9月30日
売上高	443,708	485,842
売上原価	113,204	138,022
売上総利益	330,504	347,820
販売費及び一般管理費	236,593	269,466
営業利益	93,911	78,353
営業外収益	8,688	11,526
営業外費用	1,903	1,671
経常利益	100,696	88,208
特別利益	3,957	24,492
特別損失	6,670	14,327
税金等調整前中間純利益	97,983	98,373
法人税、住民税及び事業税	28,726	52,312
法人税等調整額	9,023	△ 20,883
少数株主損益	△ 9	58
中間純利益	60,243	66,886

中間連結キャッシュ・フロー計算書 (要旨)

科目/期別	(百万円)	
	当中間期 自 2007年4月1日 至 2007年9月30日	前中間期 自 2006年4月1日 至 2006年9月30日
営業活動によるキャッシュ・フロー	△ 6,834	69,708
投資活動によるキャッシュ・フロー	5,610	△ 32,726
財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 59,491	△ 23,150
現金及び現金同等物に係る換算差額	△ 89	160
現金及び現金同等物の増減額	△ 60,804	13,992
現金及び現金同等物の期首残高	513,211	400,967
連結範囲の変更による増減額	1,529	877
現金及び現金同等物の中間期末残高	453,936	415,838

中間連結株主資本等変動計算書 (要旨) 当中間期(自 2007年4月1日 至 2007年9月30日)

	株主資本					評価・換算 差額等	少数株主 持分	純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本 合計			
2007年3月31日残高	50,000	179,860	971,483	△ 9,997	1,191,346	77,310	3,491	1,272,148
中間連結会計期間中の変動額								
剰余金の配当			△ 21,870		△ 21,870			△ 21,870
中間純利益			60,243		60,243			60,243
自己株式の取得				△ 33,362	△ 33,362			△ 33,362
自己株式の処分				4	6			6
連結子会社の新規連結に伴う剰余金増加高			141		141			141
非連結子会社との合併に伴う剰余金増加高			2,893		2,893			2,893
株主資本以外の項目の中間連結会計期間中の変動額(純額)						△ 9,891	△ 35	△ 9,927
中間連結会計期間中の変動額合計	—	1	41,408	△ 33,357	8,052	△ 9,891	△ 35	△ 1,874
2007年9月30日残高	50,000	179,862	1,012,891	△ 43,354	1,199,399	67,418	3,455	1,270,273



開発パイプラインについて (2007年11月6日現在)

第一三共は、継続的な成長の源泉となる研究開発について、循環器、糖代謝、感染症、癌、免疫・アレルギー、骨・関節の6疾患領域を中心に、以下のプロジェクトを推進しております。

	主な既存品	フェーズ1	フェーズ2	フェーズ3	申請/承認
循環器	Mevalotin Azor/Benicar/Olmetec WelChol オルメテック カルブロック アーテスト メハロチン クレメジン ハンフ、リハロ、 サンリズム、 ペプリコール	DZ-697b (米/欧/日) (抗血小板剤) HGF遺伝子プラスミド (米/欧) (虚血性心疾患) DB-772d (米/欧) (経口抗Xa剤)	DU-176b (米/欧/日)(経口抗Xa剤) HGF遺伝子プラスミド (米/欧) (末梢性血管疾患) SUN 4936h (米/欧) (急性心不全治療剤/導出先探索中) ☆CS-866CMB (日) (オルメサルタンとヒドロクロロチアジドの配合剤) CS-747 (日) (抗血小板剤)	CS-747 (米/欧) (抗血小板剤) HGF遺伝子プラスミド (日) (末梢性血管疾患) ☆CS-866DM (日) (糖尿病性腎症) ☆CS-866AZ (日) (オルメサルタンとアゼルニジピンの配合剤)	☆CS-8663 (米) (オルメサルタンと アムロジピンの配合剤/ 承認・上市) ☆CS-8663 (欧) (オルメサルタンと アムロジピンの配合剤/ 申請中)
糖代謝	ファスティック	SUN E7001 (日) (II型糖尿病/導出先探索中) AJD101 (米/欧) (インスリンシグナル経路活性化)	CS-011 (日) (グリタゾン系) AJD101 (日) (インスリンシグナル経路活性化)	CS-011 (米/欧) (グリタゾン系)	☆WelChol DM (米) (糖尿病/申請中)
感染症	Levaquin/Tavanic Banan クラビット	DC-159a (米/欧)(ニューキノロン剤) DX-619 (米/欧/日)(ニューキノロン剤) CS-758 (米/欧)(抗真菌) CS-8958 (米/欧) (抗インフルエンザ/バイオ社と共同開発)	DU-6859a inj (米) (ニューキノロン剤/注射) CS-023 (米/欧/日) (カルバペネム系抗生物質) レボフロキサシン注 (日) (ニューキノロン剤) CS-8958 (日) (抗インフルエンザ)	SUN A0026 (北米) (ペネム系抗生物質/レブリダイン社に導出) ☆レボフロキサシン高用量 (日) (ニューキノロン剤)	DF-098 (日) (Hibワクチン/承認) DU-6859a oral (日) (ニューキノロン剤/経口/ 申請中)
癌	Camptosar トボテシン クレステン	CS-7017 (米/欧)(PPARγ作動薬) DE-766 (日)(ニモツスマブ/抗EGFR抗体)	CS-1008 (米/欧)(抗DR5抗体)		
免疫・アレルギー	ジルテック	CS-0777 (米/欧)(免疫抑制剤)			
骨・関節	ロキソニン モービック		SUN E3001 (日) (骨粗鬆症治療剤/導出先探索中)	AMG162 (日) (デノスマブ/抗RANKL抗体/ P3:癌骨転移、P2:骨粗鬆症) ☆CS-600G (日) (ロキソプロフェンゲル製剤)	☆LX-P (日) (ロキソプロフェンテープ製剤/ 申請中/リードケミカル(株) と共同開発)
その他	Venofor Evovac オムニパーク オムニスキャン フェロン ユリーフ	SUN N8075 (米/欧) (脳神経保護剤/セクラ社が開発)	SUN N4057 (米/欧) (脳梗塞急性期治療剤) CS-088 (米/欧/日) (線内障/参天製薬(株)と共同開発) SUN11031 (日)(神経性食欲不振症) SUN11031 (米/欧)(カヘキシア)	SUN Y7017 (日) (軽度・中等度および 高度アルツハイマー型認知症) KMD-3213 (中国) (排尿障害治療剤)	☆CS-1401E (日) (麻酔用鎮痛剤/承認・上市) SUN 0588r (米/日) (米:高フェニルアラニン血症/ バイオマリン社に導出/申請中 日:チトラヒドロピオブテリン 反応性高フェニルアラニン 血症/申請中) ☆DL-8234 (日) (フェロン効速/C型慢性肝炎/ リハビリ併用療法/申請中)

☆効能追加、剤形追加等

ご参考	フェーズ1	フェーズ2	フェーズ3	申請/承認・上市
	少数の健康人を対象とした安全性、薬物の吸収、分布、代謝、排泄等を検討する試験。	対象疾患の少数の患者において安全性を最重点にしつつ、用法、用量の検討、有効性を検討する試験。	拡大臨床試験といわれ、数百から数千の患者を対象に有効性と安全性の確認が行われ、有用性を確認する試験。	有用性が確認されたものだけが新薬の製造販売承認の申請がなされます。

主要開発プロジェクトの概要と動向

●最優先開発プロジェクト

CS-747

(一般名: プラスグレル)

フェーズ1試験で強い血小板凝集抑制作用と早い薬効発現が認められた抗血小板剤。さらに、既存の血小板凝集阻害剤で見られたノンレスポonder(標準的な投与量で適切な血小板凝集抑制が得られない患者)が非常に少ない可能性が示唆されています。世界30ヶ国、700施設以上で約13,600名の患者を対象に既存薬との直接比較試験(フェーズ3)を完了し、現在、イーライ・リリー社と共同で欧米での承認申請に向け、準備を進めています。日本では自社でフェーズ2試験を推進中。

●米国心臓学会でフェーズ3試験結果発表<速報>

11月4日、米国心臓学会の学術集会(於:フロリダ州オーランド)にて、上記フェーズ3試験の試験結果が発表され、心臓発作のリスクの軽減に関し、競合薬よりも優越性があることが判明しました。プラスグレル投与群では出血の増加が認められるものの、臨床的有用性を有意に改善するデータが発表されたことで、現地でも注目を集めました。

●最優先開発プロジェクト

DU-176b

血液凝固第Xa因子を阻害する経口の抗凝固剤。高い経口吸収性が確認される等、1日1回投与の可能性が示唆されています。既存の抗凝固剤と比べて、薬効発現と副作用発現の間に大きな乖離が認められるため、投与のコントロールがしやすく、より使用性に優れていることが期待されます。現在、世界各国において順調にフェーズ2b(後期)試験を進めており、2007年度中にフェーズ3試験の準備に着手する計画です。

●最優先開発プロジェクト

CS-8663

(商品名: エイゾール(米国))

既に販売されている高血圧症治療剤で、アンジオテンシンII受容体拮抗剤(ARB)領域で降圧効果が高いことで定評がある当社のオルメサルタンメドキシミルと、カルシウム拮抗剤(CCB)で最も汎用されているベシル酸アムロジピンの配合剤。米国では2007年9月に承認を取得し、ほぼ同時期に欧州28ヶ国での承認申請を行いました。(次頁Zoom Up ①を参照ください)

●最優先開発プロジェクト

DZ-697b

既存の抗血小板剤と異なり、すり応力(血液の流れに伴って生じる摩擦)による血小板凝集を抑制する新しいタイプの血小板凝集抑制剤。現在、脳梗塞、急性冠症候群、微小循環障害を視野に入れ、日米欧ともに自社でフェーズ1試験を推進中です。

●その他プロジェクトのトピックス

- HGF遺伝子プラスミドは、末梢性血管疾患への適応取得を目的とした国内フェーズ3試験で、有効性が認められたため2007年6月で試験を中止し、予定を繰り上げて承認申請の準備に入りました。
- CS-1401E(麻酔用鎮痛剤フェンタニル注射液)は、2007年8月、医師主導治験としては日本初となる承認を取得し、小児への適応が拡大されました。
- アムジェン社(米国)より、2007年7月、AMG162(抗RANKL抗体デノスマブ)の骨粗鬆症・癌領域等に関する国内での開発・販売を行う独占的権利を取得しました。

米国で期待の高血圧症治療剤「エイゾール」新発売

米国子会社・第一三共INC.より、高血圧症治療剤「エイゾール(AZOR)」(開発番号:CS-8663)が、9月26日に米国食品医薬品局(FDA)より販売承認を取得し、新発売となりました。

●高血圧症治療剤の中でも期待の配合剤



「エイゾール」は、高血圧症治療剤の中で、血圧を上昇させるアンジオテンシンⅡが受容体と結合するのを妨げるアンジオテンシンⅡ受容体拮抗

剤(ARB)の中で降圧効果が高いと定評のある当社のオルメサルタン(米国製品名:ペニカー)と、血管拡張を促すカルシウム拮抗剤で汎用されているアムロジピンを組み合わせた配合剤。「エイゾール」は、アムロジピンを単独で投与した場合に比べ、顕著な降圧効果が見られることと浮腫等の副作用の発現率が低いことが、2007年5月の米国高血圧学会で明らかになっています。

米国には7,200万人の高血圧患者がいるとされ、1剤では血圧をコントロールできないケースも多く、「エイゾール」はこれらの人々への大きな福音となることが期待されています。

●米国全MRの熱い思いが1つになって

第一三共INC.は、自社のMRを900名から1,350名に増強するとともに、ペニカーのプロモーションで実績のあるフォレスト・ラボラ



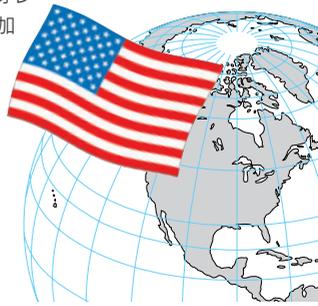
9月24日~28日にオーランドで行われた会議より



第一三共INC.ピエロニ社長

トリーズ社(本社:ニューヨーク州)とパートナー関係を結び販促強化に努めます。この販売スタートに先立って、9月24日~28日、フロリダ州オーランドにて、第一三共INC.の全米の営業担当者(MR)が集い、各製品研修を兼ねた決起大会が開かれました。その中で一番盛り上がったのは、やはり販売を目前に控えた「エイゾール」で、第一三共INC.のピエロニ社長をはじめ、日本から庄田社長も駆けつけた他、販促パートナーのフォレスト・ラボラトリーズ社も参加しました。

第一三共INC.の2007年度の売上予想は1,310億円。エイゾールの新発売、さらには糖尿病の効能追加を予定している高脂血症治療剤「ウェルコール」を加え、2009年度2,000億円の目標達成を目指しています。



Break Time 放置しておく怖い高血圧

「血圧は高いけど、なんで良くないのかよく分からない」といった方、結構いらっしゃるのではないのでしょうか?

●高血圧とは?

血圧とは、心臓から送り出された血液が血管を押す力のことで、心臓が縮んで血液が送り出される時、血管にかかる最高血圧(収縮期血圧)と心臓が広がって圧力が低くなる時の最低血圧(拡張期血圧)があります。日本高血圧学会では、最高血圧が140mmHg以上または、最低血圧が90mmHg以上を高血圧とし、数値により軽症・中等症・重症に3区分しています。(図1参照)

図1<成人における血圧値の分類>

(単位: mmHg)

分類	収縮期血圧		拡張期血圧
至適血圧	< 120	かつ	< 80
正常血圧	< 130	かつ	< 85
正常高値血圧	130~139	または	85~89
軽症高血圧	140~159	または	90~99
中等症高血圧	160~179	または	100~109
重症高血圧	≥ 180	または	≥ 110
収縮期高血圧	≥ 140	かつ	< 90

なぜ高血圧になるのでしょうか。高血圧のタイプは本態性高血圧と二次的高血圧の2種類ありますが、多くは本態性高血圧で、塩分の取り過ぎ、飲酒、喫煙、肥満、ストレス等生活習慣や遺伝的な要因が複雑に絡み合って誘発していると考えられています。

高血圧は自覚症状がなく血管に様々な負担を掛けているので、そのまま放置しておく、動脈硬化を引き起こし、脳出血や脳梗塞、心筋梗塞等、死に至る病気の原因になります。そのため「サイレント・キラー(沈黙の殺人者)」とも呼ばれています。

●高血圧と診断されたら...

家庭で簡単に測れる血圧計や健康診断等で普段から自分の血圧を知ることが大切です。そして、高血圧と分かったら、医師の診断・判断に従って、症状に応じ、塩分を控えた食事療法や適度な運動を行い、それでも改善されない場合、薬の服用を行います。

血圧を下げる高血圧症治療剤にはいろいろな種類があり、症状に応じて処方されています。(図2参照)

図2<主な高血圧症治療剤の種類>

種類	内容	第一三共製品
ARB	アンジオテンシンⅡ受容体に特異的に結合し、血管収縮、体液貯蓄、交感神経亢進を抑制する	オルメテック
カルシウム拮抗剤	血管細胞にカルシウムが入り込むことを防ぎ、血管を拡張させて血圧を下げる	カルブロック
交感神経抑制剤	交感神経を抑制し血管を拡張させて血圧を下げるα遮断薬と、心拍数と心拍出量を抑え血圧を下げるβ遮断薬がある	アーチスト(β遮断薬)
ACE阻害剤	血圧を上昇させるアンジオテンシンⅡの産生を抑えることで血圧を下げる	エースコール、コバシル、カプトリル
利尿剤	尿の量を増やして身体の血液を減らし、心拍出量を減らし、血圧を下げる	ルネトロン

当社には、5タイプの高血圧症治療剤が揃っており、医師の処方(投薬)の選択肢を増やすことができ、高血圧治療において広く貢献しています。



オルメテック

カルブロック

アーチスト



第一三共ヘルスケア・日本初のしみ(肝斑)改善薬



「トランシーノ」発売 ~そのシミは治せます~

しみ改善成分として「トラネキサム酸」を配合し、医薬品として日本で初めて「しみ(肝斑に限る)」の効能効果を取得した一般用医薬品「トランシーノ」が、ヘルスケア事業子会社・第一三共ヘルスケアより、9月4日に新発売されました。

●「肝斑(かんぱん)」とは？

「肝斑(かんぱん)」とは聞きなれない言葉ですが、女性のほほの両側に広がる「しみ」のことで、そばかすをはじめとするしみの種類の1つで、女性ホルモンの乱れが出現の主な原因だと見られています。30代~40代の女性に多く見られますが、その認知度は低く、肝斑にターゲットを置いた製品もこれまでありませんでした。しかし肝斑に「トラネキサム酸」が効くことは、すでに皮膚科医の間では広く認められており、その効能を一般用医薬品に採用。肝斑という新しい効能を打ち出した日本初の製品として発売しました。

●「美と健康」で多くのメディアからも注目



8/22に行われた記者発表会

「トランシーノ」は発売に先がけ、8月22日、ザ・プリンスパークタワー東京(東京・港区)にて、記者発表会を開催しました。美と健康、そして新効能を持つ医薬品ということで、メディアの関心も高く、115のテレビ局、72の新聞社・雑誌社を含め報道関係者326名が来場。研究開発に携わった東京女子医科大学の川島眞教授、肝斑治療に詳しい近畿大学医学部の小西奈津子医師による肝斑のメカニズムに関する発表や臨床試験概要の説明、商品開発担当者による商品説明、テレビCMのキャラクターを務め

るヘア・メイクアップアーティストの藤原美智子さんの登場・スピーチ等、盛りだくさんの内容で、当日のフジテレビ系「スーパーニュース」、日本テレビ系「リアルタイム」等のニュースワイド番組で放送された他、その後も多くのテレビ・新聞・雑誌等で取り上げられています。また、屋外広告や薬局の店頭等、積極的なプロモーションを展開しています。



一般用医薬品では10億円の売上でヒット商品と言われていますが、「トランシーノ」の初年度売上目標は34億円。2007年度の第一三共ヘルスケアの全売上高の約6%を見込んでおり、新市場創造型製品として積極的なプロモーション活動を行い、大型商品への育成を目指しています。

なお、肝斑啓発ウェブサイト「[かんぱんINFORMATION \(www.kanpan.info\)](http://www.kanpan.info)」及びブランドサイト「[TRANSINO.JP \(www.transino.jp\)](http://www.transino.jp)」を通じ、いろいろな関連情報を提供していきます。ぜひ一度ご覧になってください。



第一三共ヘルスケア井手口社長(左)と藤原美智子さん(右)。藤原さんは「多くの女性が素肌の美しさに自信を持ってようになってほしい」とコメント

Break Time 風邪にご用心

今年も風邪の季節がやってきました。人は1年間に平均5~6回かかると言われています。「風邪くらいで…」と軽く見られがちな病気ですが、かかってしまった後で寝込んで健康のありがたみを実感するものです。ご用心ください。

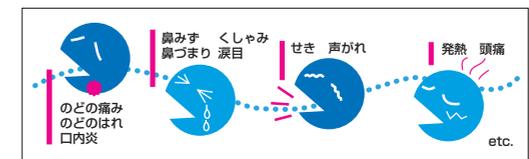
●風邪とは？

「風邪」とは、主にウイルスが原因で起こる呼吸器の急性炎症性疾患の総称です。原因は様々ですが、寒さやアレルギーによるものはごく一部で、大部分は何らかの病原微生物の感染で起こります。中でも最も多いのはウイルスで、90%の原因となっています。風邪を起こすウイルスは多く知られていますが、インフルエンザウイルスによるものは全身症状も強く、流行の規模と伝播速度は、他ウイルスをはるかにしのぎます。

●風邪のタイプ

一口に「風邪」と総称されますが、その症状は主にくしゃみ、鼻みず、鼻づまり、のどの痛み、せき、たんといった呼吸器系

ですが、詳細にみると、鼻みずがよく出る「鼻風邪」、高熱・頭痛・全身がだるいインフルエンザ、腹痛・下痢といった消化器系、のどの痛みだけが激しい風邪等、多少違ったタイプに分けられます。



風邪にかかってしまったら、休養をとって安静に過ごし、体の保温と保湿に心がけ、栄養を十分とりましょう。

<第一三共ヘルスケアの風邪薬>

コンセプトの異なる4つのブランドを用意し、皆様をサポートしています。

●新ルルAゴールド



鼻みず、鼻づまり、のどの痛み等11症状に効く総合かぜ薬(主にファミリー向け)

●ルルアタックIB



休めないあなたに。のどの痛みと熱に速攻アタック!

●カコナール



葛根湯ドリンク。ひきはじめの風邪に1日2回で効く

●プレコール



朝と夜だけ飲めば効く。持続性カプセルの特長を生かす(パーソナル向け)

●ペラック



のどの痛み・せき・鼻みずを訴求した総合感冒薬



社会の一員として 地球温暖化防止のためCO₂の削減に努めています

地球温暖化は地球規模の環境問題。当社は、これから、グローバルに事業を成長させるために、生産量を増加していかなければなりません。エネルギー使用の効率化を追求し、CO₂排出を削減し、地球温暖化防止に貢献していきます。ここでは、事業所における具体的な取り組みを紹介します。

●高効率ターボ冷凍機の導入



生産子会社・第一三共プロファーマの静岡工場では、既存設備の老朽化による更新に際し、エネルギー効率とCO₂発生低減に優れたターボ冷凍機(写真)を導入しました。これにより同地区では、電気使用量が若干増加したものの重油使用量が大幅に減少し、CO₂排出量が約2,000トン削減されました。

●ブラックイルミネーションへの参加



葛西研究開発センターの看板の点灯時(左)とブラックイルミネーション実施時(右)

環境省が毎年夏至に開催するキャンペーンに参加し、夏至の時期の数日間、全国10数カ所で、看板、ショーウィンドウの照明などを消灯しています。また、研究開発センターと工場では、その期間を8月まで延長・継続して消灯し、省エネルギーを実践しています。

●バイオマスエネルギーへの転換

ヨーロッパ子会社・第一三共ヨーロッパのパッフェンホーフェン工場(ドイツ)では、工場から廃棄される有機生物の資源ごみを提供しています。その資源ごみは地域のバイオマス*電力の供給源として活用されています。さらに2006年度には工場内にバイオマスエネルギーの接続装置を設置し、工場で使用する電力の多くが、バイオマスエネルギーでまかなわれるようになり、その結果、500トンのCO₂排出量の削減が見込まれます。

*バイオマス:動植物に由来する有機物であってエネルギー源として利用することができるもの

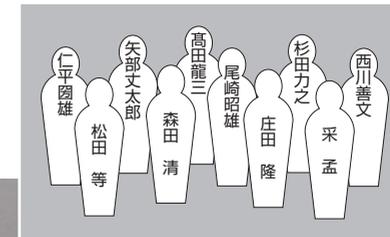


パッフェンホーフェン工場



企業インフォメーション

- 商号 第一三共株式会社
(DAIICHI SANKYO COMPANY, LIMITED)
- 事業内容 医療用医薬品の研究開発、製造、販売等
- 従業員数 約15,000名(第一三共グループ)
- 役員(2007年9月30日現在)



代表取締役会長	森田 清	社外取締役	仁平 圀雄	常勤監査役	高柳 輝夫
代表取締役社長	庄田 隆	社外取締役	西川 善文	常勤監査役	永田 光
取締役	尾崎 昭雄	社外取締役	矢部丈太郎	社外監査役	島田 馨
取締役	高田 龍三	社外取締役	杉田 力之	社外監査役	樋口 公啓
取締役	松田 等				
取締役	采 孟				

●事業所

本社：東京都中央区日本橋本町三丁目5番1号
 主要な国内事業拠点(第一三共グループ)
 支店：札幌、東北(宮城県)、東京、千葉、埼玉、横浜、
 北関東(東京都)、甲信越(東京都)、東海(愛知県)、
 京都、北陸(石川県)、大阪、神戸、中国(広島県)、
 四国(香川県)、九州(福岡県)
 ※上記の他、全国主要都市に営業所を設けております。
 研究所：品川(東京都)、葛西(東京都)、袋井(静岡県)、
 群馬、大阪
 工場：秋田、小名浜(福島県)、平塚(神奈川県)、
 小田原(神奈川県)、静岡、大阪、高槻(大阪府)

●主要な国内グループ会社

会社名	主要な事業内容
第一三共プロファーマ株式会社	医薬品の製造
第一三共RDアソシエ株式会社	グループの研究開発サポート業務
第一三共ビジネスアソシエ株式会社	グループのビジネスサポート業務
第一三共ハピネス株式会社	グループのビジネスサポート業務
第一三共ロジスティクス株式会社	物流および関連業務
第一三共ヘルスケア株式会社	ヘルスケア品の製造および販売
アスピオファーマ株式会社	医薬品の研究開発・製造・販売

●海外グループ企業

1 イギリス
 第一三共デベロップメント LTD.
 医療用医薬品の開発
 第一三共UK LIMITED
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

2 ドイツ
 第一三共ヨーロッパ GmbH
 グループ統括/医薬品の開発・製造
 第一三共ドイツ GmbH
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

3 フランス
 第一三共アルトキルヒ SARL
 医薬品原料等の製造 (第一三共ヨーロッパ・グループ)
 第一三共フランス S.A.S.
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

4 オーストリア
 第一三共オーストリア GmbH
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

5 ベルギー
 第一三共ベルギー N.V.-S.A.
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

6 スイス
 第一三共スイス AG
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

7 スペイン
 第一三共スペイン S.A.
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

8 イタリア
 第一三共イタリア S.p.A.
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

9 オランダ
 第一三共オランダ B.V.
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

10 ポルトガル
 第一三共ポルトガル LDA.
 医薬品の販売 (第一三共ヨーロッパ・グループ)

11 中国
 第一製薬(北京)有限公司
 医薬品の開発・製造・販売
 香港第一三共有限公司
 医薬品のマーケティング支援
 上海三共製薬有限公司
 医薬品の研究、開発、製造・販売

12 韓国
 韓国第一三共株式会社
 医薬品の販売

13 タイ
 第一三共タイ LTD.
 医薬品・化成品等の輸入・販売・仲介

14 台湾
 台湾第一三共股份有限公司
 医薬品の製造・販売

15 アメリカ
 第一三共 INC.
 医薬品の研究・開発・販売
 ルイトボルド・ファーマシューティ
 カルズ Inc.
 医薬品および動物薬の製造・販売

16 ブラジル
 第一三共ブラジル LTDA
 医薬品の製造・販売

17 ベネズエラ
 第一三共ベネズエラ S.A.
 医薬品の製造・販売

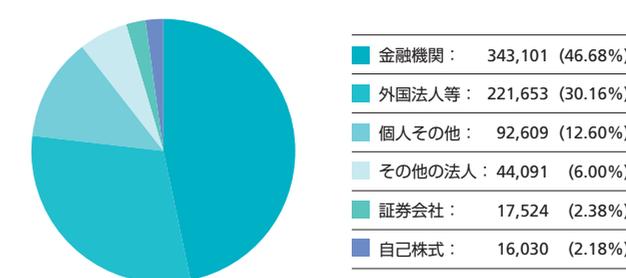
●株式の状況(2007年9月30日現在)

発行可能株式総数	2,800,000,000株
発行済株式の総数 (自己株式16,030,389株を含む)	735,011,343株
株主数	67,249名

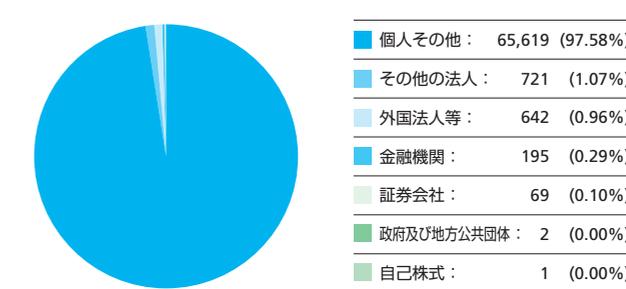
●大株主

株主名	持株数(株)	持株比率(%)
日本マスタートラスト信託銀行 株式会社(信託口)	62,329,800	8.48
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口)	43,434,600	5.91
日本生命保険相互会社	41,839,182	5.69
ザチエスマンハットンバンクNA ロンドンSLオムニバスアカウント	17,592,200	2.39
第一三共株式会社	16,030,389	2.18
株式会社三井住友銀行	13,413,368	1.83
ステートストリートバンクアンド トラストカンパニー	12,228,785	1.66
モルガンスタンレーアンド カンパニーインク	10,669,461	1.45
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口4)	10,277,600	1.40
株式会社三菱東京UFJ銀行	9,468,983	1.29
合計	237,284,368	32.28

●所有株式数別分布(千株)



●株主数別分布(名)



●株価の推移(月足)

